なぜ物質創始説か
―ミルトンによるアウグスティヌス的「無」の否定―

江藤あさじ

序

ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）の著作の中に、アウグスティヌスの著作と同じタイトルの神学書『キリスト教教義論』（*Christian Doctrine*, 1825）があり、そこには彼自身による神学解釈が詳細に記されている。そしてその中には、まさにアウグスティヌスの名が登場し、彼の神学理論を明らかに意識した記述が見られる。またミルトンの晩年の作品である『失楽園』（*Paradise Lost*, 1667．1674）にも、創世記の記述に忠実に従いながら、ミルトン独自の神学解釈がふんだんに織り込まれている。そしてアウグスティヌスは、ミルトンよりも遥かに先立って、『創世記逐語注解』以外においても、神の創造の問題をめぐって膨大な著作を残している。『失楽園』には直接アウグスティヌスの名前が登場することはない。しかし、C. S. ルイス（C. S. Lewis）が著書 *A Preface to Paradise Lost* の中で、"Milton's version of the Fall story is substantially that of St. Augustine, which is that of the Church as a whole."（65）と指摘して以来、フィオーレ（Peter A. Fiore）の *Milton and Augustine* という直接二人の名に言及した研究書以外においても、『失楽園』におけるミルトンの神学解釈をめぐっては、アウグスティヌスの神学からの影響をこれまでに多くの研究者が指摘してきた。例えば、神に拠らない被造物はなく、またそれら存在する被造物は全て善であるという点、しかし善から堕落した被造物にも、神はその存在と行動を許しているという点、また最初の堕落は傲慢によって引き起こされたとしている点、そして、その堕落の原因は神にあるのではなく、人間の自由意志によるものだという

点、さらに神によって定められた結婚の善性などが挙げられる。これらは全て、創世記という神の万物創造と人間の堕落の物語を解釈する上で最も重要な位置を占めている問題である。

そのほか、創世記の記述には見られないが、叙事詩としてミルトンが付け加えた様々な物語の中にも、両者の共通性がしばしば指摘されている。例えばセイタンの娘である「罪」と、彼らの近親相姦によって生まれた「死」の存在性についても、アウグスティヌスからの影響が見られる(Fallon 168-93)と論じられたり、また、イヴがアダムに向かって

> I chiefly who enjoy
> So far the happier lot, enjoying thee
> Pre-eminent by so much odds, while thou
> Like consort to thyself canst nowhere find.　(4.445-48)

という台詞が、アウグスティヌスが神に捧げた賛美の言葉のエコーであると指摘する声(Turner 41)もある。さらに、ミルトンがプラトンの影響を受けている点についても、"Augustine had told him [Milton] (and all other Christians as well) that the only philosophy qua philosophy a Christian could seriously entertain was Platonism." (Shoaf 7) と断言する研究者もいる。そして何よりも彼らに共通しているのは、共にグノーシス主義の流れを汲むマニ教に見られるような善悪の二元論を否定し、神の摂理が正しいということを証し、神の絶対性と、それによってもたらされる万物の相関性を説くことを目標としていることなのである。以上のように、両者は共通の題材を取り上げて、共通の目的のもとに、独自の神学解釈の展開を試みた結果、多くの共通点が指摘されるに至った。しかし彼らには決定的な相違点が存在する。それは万物が何から造られたのかという起源に関する両者の主張に見られるのである。本論では、アウグスティヌスの主張する創造説の中にミルトンが見出した矛盾点を取り上げ、そしてそれを、ミルトンが主張する創造説がどのように克服しているのかについて見ていきたい。

1．万物の起源

万物の起源についての関心の歴史は、紀元前6世紀のギリシャ時代にまで遡る。オリエントで発生した科学的知識に影響を受け、神話から切り離して自然を合理的に研究しようとする自然哲学者らによって、様々な説が出された。それらの説のほとんどでは、万物の起源は物質であった。紀元前5世紀になって、哲学の対象は自然から人間へと移っていった。その頃のアテネでは、ソクラテス（Socrates, 470?-399B. C.）、プラトン（Plato, 427?-347B. C.）、アリストテレス（Aristotle, 384-322B. C.）の三大哲学者の出現によって哲学が大成された。ソクラテスは道徳的真理である「善」への到達方法を見出し、プラトンがその思想をイデア論へと発展させた。彼は実在するイデアの世界と、非実在である物質的世界という二元的なイデア論を打ち立てたが、その弟子であるアリストテレスはそれを批判し、実体は物質を離れて存在することはないと説いた。

これらの哲学は、ギリシャだけでなく、キリスト教の世界にも大きな影響を与えることとなった。特にプラトンによって確立されたイデア論は、霊肉二元論という考えの基盤となり、キリスト教神学に多大な影響を与えた。そして、善悪の概念を明確に持つキリスト教では、堕落した魂の悪を封じ込めるために、罰として肉体が与えられたのだという考えがオリゲネス（Origen, 185?-254）やアンブロシウス（Saint Ambrose, 339-397）らによって主張された。しかし、この悪の封じ込めとしての肉体という概念を疑問視し、反論を唱えた者がいた。それがアウグスティヌスである。彼が、その師であるところのアンブロシウスの解釈に承服できなかった理由を、フォーサイス（Neil Forsyth）は次のように述べている。

> （アレクサンドリアのフィロンが罰としての肉体という概念を提唱し、それをオリゲネスが取り入れて以来）霊的精力が物理的世界へ前宇宙的に降下するということがずっと続いていた。しかし、グノーシス主義者にとっての人間の「堕落」は救済の開始であったが、フィロンにとっては、今度はそれは

> 物理的肉体への一層の下降—アダムとエバに新たに獲得された「衣服」もしくは動物の皮—であった。かくして、肉体自体が罪の罰だったわけである。この解釈によれば、天地創造それ自体が、ヴァレンテヌス的なグノーシス主義者とマニにとってそうであったように、物理的限界内へ悪を封じ込めることになってしまうのである。アウグスティヌスはこの教義に従って、創世記においては創造すべてが善であるということを発見したので、この悪の封じ込めという可能性を拒否しようと躍起になった。(571-72; 括弧内筆者)

肉体に閉じ込められた悪はまさに霊魂に相当するものであり、その霊魂とは、アウグスティヌスにとっては神に由来する自然本性を意味している。自然本性が悪である実体は、神の創造による存在物は全て善であるという彼の神学に矛盾するものであった。さらに、霊肉二元論を否定していたアウグスティヌスにとって、「罪の罰としての肉体」というプラトンの霊肉二元論的な解釈には承服できなかったことはもとより、オリゲネス的解釈に従えば、より罪深き霊が肉体という善によって覆われることを意味し、これは彼にとっての霊肉の優劣関係を覆すものとなるのである。その意味においても、アウグスティヌスが師の解釈を認めることができなかったのだと考えられる。

こうしてアウグスティヌスは、自己の神学の正当性を証明するために、万物の起源という神の創造の原点を見直す必要に迫られた。そして彼は、神の正しいことを証明するという目的で、万物の起源は「無」であると主張するに至った。一方ミルトンは全く同じ目的で、その起源を「物質」とし、無からの創造説を否定している。神学理論で多大な影響を受けているとされ、さらには堕落の物語のアウトラインはアウグスティヌスに従っているとされているにも関わらず、なぜ、ミルトンは彼の創造説を認めることができなかったのだろうか。確かに、ミルトンの生きた時代において、ミルトンが主張する物質創始説は存在しなかったわけではない。ダニエルソン(Dennis Richard Danielson)の詳細な研究によると、宇宙の起源が原子であると説いたエピキュロス(Epicurus, 341-270B. C.)に反駁するために、チャールズ1世と2世の主治医であった司祭ウォルター・チャールトン(Walter Charleton, 1619

-1707）が、“That God created the world *ex nihilo*, proved by Arguments Apodictical.”という論文を発表しているという(33)。このような論文が発表されたこと自体が、物質創始説が根強く残っていたことを物語っている。とは言え、ミルトンの時代に広く流布していたのは「無」からの創造説であったことは間違いない。では、なぜミルトンは敢えて少数派によって支持されていたとみられる物質創始説を主張したのだろうか。ダニエルソンも指摘したように、ミルトンは様々な宗派や文化的枠組みを超えて、自分にとって認められるものとそうでないものを自由に選択することのできる急進的精神の持ち主であった（Danielson 180）。そしてミルトンは、「無」からの創造説を否定し、物質創始説を支持するにいたった。しかしそこには必ず理由があるはずである。

2．絶対的悪としての「無」

自身が9年間をマニ教徒として過ごした経験を持つアウグスティヌスは、神の創造が全て善であるが故に、「悪」の存在をいかにして神に帰することなく説明できるかという問題の解明に晩年を注いだ人物である。悪の起源を創造神話の中に組み入れて、その原因を神に帰したマニ教に対して、その原因を神に帰さないためにも悪とは何であるかということの解明から着手したのである。そこで彼が拠り所としたのが旧約外典第二マカベヤ書7章28節に記されている、万物は無から創られたという言葉であった。その「無」からの創造説において、人間が悪に傾くのは、被造物は無から造られたのであって神の本質から造られたのではないがゆえに可変的、つまり変化しうるものであり、その本性には「自然の欠陥」が属しているからであると彼は説明する。そして理性的被造物の第一の悪と呼ばれる欠陥は、善ではあるが可変的な善の意思、つまり我々の道徳的自由意志であると主張する。「自然の欠陥」は自然本性ではないが、これが自然本性に属しているために、人間は欠陥を持つ自らの自由意志でもって悪へ傾く可能性を秘めているというのである。そして悪に傾けば傾くほど、つまり「時間的で可変的な事物を切望すればするほ

ど、非物体的で永遠・不可変な存在に似ないものとなる」(『神の国』11.17)[1]と説く。これは量的というより質的な変化を意味するものであり、存在性が低下することを指している。従ってこれは、プラトンのいうところの、イデアを失った没落した魂と同じ構造を持っていると言える。そして彼はこの存在性が低下していくプロセスのことを「無化」と呼ぶのである。そして、たとえ「無化」されていったとしても、言い換えれば、「善の欠如」の程度が大きくなっていったとしても、実体として存在する以上、それは程度こそ低くなってはいるが善であるのだと『神の国』の中で主張し、これが堕落後の人間の状態であると説明する。罪を犯しても尚「善である」と言えるのは、神が存在の創始者であり、神の創造は全て善であるからだというわけである。つまり、彼にとって絶対的な悪は完全な「無」を意味することとなり、実体として存在しなくなるのである。従って、一般に我々が「悪」とか「悪意」と呼んでいるものは、彼にとっては「無化」していくプロセスを指していることになるのである。その結果、創造において悪は存在していなかったと結論づけ、悪の起源を神に帰さない理論を見出し、「悪」は「無」から造られたがゆえに理性的被造物の自然本性に属する「自然の欠陥」によって引き起こされる、という論理に達するのである。そして、そのようなアウグスティヌスの創造説は、ミルトンの生きた17世紀英国でも最も支持される説として広く流布していたのである。

一方ミルトンも、アウグスティヌスと同様に、神の唯一性、絶対性を信じ、悪の問題に非常に関心を寄せていた。しかしミルトンはアウグスティヌスが見出した理論を真っ向から否定し、あくまでも神は物質から、魂を含む全てを創造したのだと主張するのである。ミルトンは万物の起源について『失楽園』の中で次のように述べている。

O Adam, one almighty is, from whom
All things proceed, and up to him return,
If not depraved from good, created all
Such to perfection, one first matter all,

> Indued with various forms, various degrees
> Of substance, and in things that live, of life;　(5.469-74)

そして『キリスト教教議論』では、以下のように「無」からの創造を否定している。

> Since God is the first, absolute and sole cause of all things, he unquestionably contains and comprehends within himself all these causes. So the material cause must be either God or nothing. But nothing is no cause at all; (though my opponents want to prove that forms and, what is more, human forms were created from nothing). (*C.D.* 308) [2]

ここでミルトンは「無」は "cause" にはなりえない、というたった一言で「無」からの創造説を否定しているが、別の箇所でも次のように述べている。

> ... nothing is neither good nor any kind of thing at all. All entity is good: nonentity, not good. It is not consistent, then, with the goodness and wisdom of God, to make out of entity, which is good, something which is not good, or nothing. (*C.D.* 310-11)

これは、神の被造物が「無」に帰することはないことを主張するために、「無」についてミルトンが説明している箇所である。この箇所からわかることは、ミルトンが善である被造物に対置する「無」は、悪に他ならないと考えているということである。そしてこれは、アウグスティヌスの「無」と悪の概念と一致している。アウグスティヌスが、自然本性が悪に傾けば傾くほど、その本性における欠如の部分が大きくなると考えていたことは先に見たとおりである。そして彼はこのことを「無化」と呼んだのであるが、これによって完全な「無」は絶対的悪をも意味していた。もし万物の起源が「無」であるとすれば、万物の起源が絶対的悪であったということは言うまでもなく、創造の始めに、すでに絶対的悪があり、万物は神に属さない「無」という絶対的悪から生み出されたことになる。

このようなアウグスティヌ的解釈の持つ危険性については、既に指摘され

ていることである。例えばフォーサイスは、「事実、アウグスティヌスにとって無とはマニ教的悪の相当物もしくは代替であることをわれわれは承知している。二つの理論が形而上学的にはいかに異なっていようとも、始原の闇と始原の無は、物語の役割においてはひどく似て見える」(598)と指摘しているし、またルネ・ネッリ（René Nelli）においては、著書『異端カタリ派の哲学』の中で、マニ教の流れを汲むカタリ派の理論とアウグスティヌスのそれとの共通点を多く見出している。勿論アウグスティヌスは、この創造説を基盤にして、より大きな問題に光を見出したのである。つまり、フォーサイスが言うように、この「無」からの創造説は「『告白録』に記録されている瞑想を通して、かれがようやく行きついた、はるかに雄大な体系―悪から善を生ぜしめるという神の構想―の一側面にすぎない」(598)のであり、マニ教的側面だけを捉えて、彼の理論の全てを否定することは出来ない。そしてミルトンもまた、アウグスティヌスの神学理論を完全に否定しているのではない。むしろ、多くの研究者が指摘するように、独自の神学理論を展開させる上で数々の共通点がみられることは確かなのである。しかし、先に引用した『キリスト教教義論』の “Since God is the first, absolute and sole cause of all things.” (308)の部分に関して、アウグスティヌス的「無」からの創造説を当てはめると、それは神を非難しかねない解釈を生み出す危険性を孕むこととなるのである。この文章を記したとき、ミルトンがその危険性を意識していたのかどうかは定かではない。しかし、「無」からの創造説を否定することによって、その危険性は回避されることとなったのである。

3．物質から霊質なるものへ

さてミルトンは、『キリスト教教議論』において「“cause”にはなりえない」として「無」からの創造説を否定した。しかし、『失楽園』や『キリスト教教義論』を詳細に読むと、ミルトンが物質創始説を支持した理由がさらに明らかとなる。それは、神が唯一の創造主であるという大前提による、万物と神とに繋がりがあることを証明することである。ミルトンは、この点に関して

「無」からの創造説では解明できない点を提示し、そして「物質」からの創造説によってそれらに合理的説明を試みているように思われる。その解明できない点とは、魂の形成の問題[3]に代表されるような、物質と霊質との関係によって生じる問題なのである。

アウグスティヌスの場合、全ては「無」から創造されるのだが、その創造物は二通りに分けられる。一つは、神の手によって「無」から創られた原質よりさらに造られた物質的実体であり、もうひとつは、原質を介さずに直接「無」から造られた非物質的実体である。肉体は前者にあたり、魂は後者にあたる。彼はプラトンの哲学とマニ教の教理の影響を受け、「物質」を非常に軽視する傾向にあったと考えられる。また、その傾向が、彼が「無」からの創造説を唱える基盤になっているとも考えられる。そしてその傾向ゆえに、彼は『三位一体』において、物質的実体が非物質的実体と同化することは決してありえないのだと主張し(10.10)、また『真の宗教』においては、「全ての物体的被造物は、もしそれが神を愛するところの魂によって所有されるならば、最低の善であるが、その種類としては美である」(『初期哲学集』(2) 323)と述べている。このことから分かるように、肉体は魂に所有されて初めて善の性質を帯びることとなると主張するのである。従って、彼が人間とは魂と肉体の統一体であると説く時、一元論的主張をしているつもりであっても、明らかに霊肉二元論を支持していることになるのである。勿論これは、肉体の源が悪であり、魂の源が善であるというマニ教的二元論とは根本的に区別されるものである。しかし、死後、魂は肉体から分離され、魂のみが昇天するのだという彼の理論にもみられるように、アウグスティヌスの解釈では、魂と肉体は完全に区別されていることがわかる。彼にとって物質的実体は天に存在してはならないものであり、それ故昇天すべき魂は、決して物質的実体であってはならないのである。まずこの点で、ミルトンとの間に相違点があることに我々は気付く。『失楽園』の世界では、物質的なものと非物質的なものは、完全に分断されたものとして描かれてはいない。そして、ミルトンの描く天上の世界には、混沌の世界にあった状態からあまり変化していない

と思われる物質[4]が存在するのである。ミルトンにとってこのことは、万物の神との繋がりがあることを証明するためにも、極めて重要な意味を持つ。

最初に、物質的なものと非物質的なものとが分断されず、互いにどのような関連性をもっているのかについて述べられている箇所を見てみたい。『失楽園』第5巻において、アダムは天上からの来訪者であるラファエルのために、楽園の食べ物でもてなそうとする場面がある。天使が食事をするか否かについては、神学上の問題の一つでもあるが[5]、その点に関して『失楽園』では以下のように述べられている。

nor seemingly
The angel, nor in mist, the common gloss
Of theologians, but with keen dispatch
Of real hunger and concoctive heat
To transubstantiate;　(5.434-38)

この箇所は、天使が食事をするように見えたのは幻影であるとする当時の教父たちの解釈に異論を唱えているミルトン自身の声であると考えられる。『失楽園』の世界では、霊的存在とされる天使たちにも、人間と同じように "real hunger" というものが感じられ、そして "transubstantiate" する機能が備わっている。何故彼らにもこのような機能が必要なのか、『失楽園』ではラファエルが次のように説明する。

Therefore what he gives
(Whose praise be ever sung) to man in part
Spiritual, may of purest spirits be found
No ingrateful food: and food alike those pure
Intelligential substances require,
As doth your rational; and both contain
Within them every lower faculty
Of sense, whereby they hear, see, smell touch, taste,
Tasting concoct, digest, assimilate,
And corporeal to incorporeal turn.　(5.404-13)

この箇所から、人間の場合も天使の場合も、理性と肉体、及び理性と霊的肉体はひとつの系統をつくりあげており、全くの個別の存在ではないとミルトンが考えていたことがわかる。この解釈に従えば、感覚と理性とが分断されることはなく、体内において“corporeal”なものが“incorporeal”なものへ変化することが可能になるのである。ラファエルの説明では、“whatever was created needs / To be sustained and fed; of elements / The grosser feeds the purer”(5.414-16)とあるように、神による被造物は全て、その存在性を維持するためには養われなければならないという。これは、『失楽園』の世界では、生命原理をもたない被造物をも含んでいることを意味している。例えば第5巻415-25行においては、大地が海を養い、そしてそれらが空気を養って、その空気は天上の火を養うという連鎖が描かれている。さらにその火は、宇宙では最下位に位置する月を養い、月はその他の天体を養い、そしてそれら全てのものから太陽が養われていると述べられている。そしてその返礼として、太陽は全てのものに光を注ぐのである。これは、神の創造の一部ではあるが、人間の目によって理解することのできない宇宙の事物について、ラファエルがアダムに説明している箇所である。ここで語られているのは、単なる天文学的な知識の羅列ではない。宇宙の天体が、どのように連鎖しながら相互に依存して存在しているかが詳細に述べられているのである。ミルトンは、当時の自然科学が理解していたもの[6]を十分に活用しながら、それらが共生しているしくみを、独自の解釈でもって描いているのである。

そしてその太陽の光を浴びた地球の大地が育てるのが、生命原理のみを持つとされる植物である。

flowers and their fruit
Man's nourishment, by gradual scale sublimed
To vital spirits aspire, to animal,
To intellectual, give both life and sense,
Fancy and understanding, whence the soul
Reason receives, and reason is her being,

Discursive, or intuitive, discourse
Is oftest yours, the latter most is ours,
Differing but in degree, of kind the same.　(5.482-90)

太陽の恵みを受けて育った植物は、やがて人間の滋養物となる。そしてそれらは様々な段階を経て理性に成長するのである。

アウグスティヌス的解釈では、理性とは神によって直接「無」から作られた非物質的実体である魂に属するものであり、「無」から造られた原質を経て造られることは決してない。物質的実体の肉体は理性と結合することによって、初めて一つの固体としての生命体となる。つまり肉体は、非物質的実体である魂なしでは、何ら機能ももたない物質に過ぎないのである。ここで、アウグスティヌスの主張する霊肉一元論は、実質上、二元論との区別がなくなる。しかしミルトンの場合は、物質が肉体に消化吸収されることにより、最終的に理性を生み出すと考えるのである。このようにして神が創造した善は、全ての営みにおいて連鎖するのである。それは人間の場合においてのみに言えることなのではなく、天使の場合も同様であり、そして生命原理を持たないものにおいても然りなのである。アウグスティヌスは物質創始説を否定する呪縛から決して解き放たれる事はなかったが、ミルトンはこのことに関してまったく自由であったから、このような解釈を可能にしたのかも知れない。先述の通り、アウグスティヌスは若き時代において9年間をマニ教徒として過ごした。そして彼をマニ教からキリスト教へと回心させ、そして今度はマニ教に反駁するのに大いに貢献したのが、ネオ・プラトニズムであった。彼はネオ・プラトニズムの中に、自由意思によって善と悪を自由に選択できる魂の中間的存在を見出した。そして、己の高慢ゆえに神から離反することを選び、肉体的悦楽に溺れること、つまり、物質的なものに執着することが罪であるという解釈に到達するのである。しかし、ここでアウグスティヌスは、「悪しき原質」というマニ教的物質観を払拭することはできなかったと考えられる。それゆえアウグスティヌスは、マニ教的「悪しき原質」を一

旦「無」へと引き戻すことによって消滅させ、そして「悪しき原質」ではなく、善ではあるが最も低次の存在性を持つというネオ・プラトニズム的物質を神が生ぜしめたとすることにより、マニ教的物質観を否定する根拠を得た。

一方ミルトンは、最初からマニ教的物質観とは無縁であったので、アウグスティヌスのような苦労を経験することなく物質創始説を主張することができたのかもしれない。「悪しき原質」が神と同じように永遠の昔から存在してはいなかったことは、ミルトンにとっては自明の理であり、むしろ「原質」が「悪しき」存在であるという概念からは完全に自由であったのだろう。ミルトンにとっての最初の原質は、混沌の世界がそれにあたる。そこは光の地である天国とは対照的な闇の地であり、絶えず原子が争っている場所である。この部分だけを取り上げれば、マニ教が主張したような「悪しき原質」の宝庫として描かれているような錯覚を受けるかもしれない。しかしミルトンの混沌は、神と並列する独立した存在でも、また悪しき原質の宝庫でもない。セイタンら堕天使が神の雷を恐れて混沌の世界に逃げ込んだ時、彼らはそのまま混沌の世界を通過して、神が別に用意した地獄へと堕ちる。従ってミルトンの混沌は、罪を犯した者が住むべきところでも、あるいは善であったものを吸収するマニ教的闇の世界でもないことは明らかである。『失楽園』においてミルトンは、混沌の世界を次のように位置付けている。

> Boundless the deep, because I am who fill
> Infinitude, nor vacuous the space.
> Though I uncircumscribed my self retire,
> And put not forth my goodness, which is free
> To act or not, necessity and chance
> Approach not me, and what I will is fate.　(7.168-73)

ここに述べられている「混沌は神が退いた部分から生じたものである」ということが、ミルトンの物質創始説を論じるにあたり非常に重要な点となっていると思われる。この "retire" という語は、支配権の放棄を意味するのではない。最初にドニ・ソラ（Denis Saurat）が指摘したように、"retire" とい

う行為によって万物の起源である物質が生まれるのである（238）[7]。ソラは、神が“retire”したのは神自身の意思であると解釈しているが、それは同時に、善以外の何ものでもない自身の本質を、退けたのだとも解釈できるのである。なぜなら、ミルトンが『キリスト教教義論』で述べているように、神の被造物は全て神の子供ではあるけれども、神と同じ本質を分けられたものは存在しないからである。しかし、混沌の世界には神の本質である善が存在してはいないが、もともとは神の一部分であり、今尚神の支配の範囲内にあることがわかる。混沌は形無き世界であるが、“vacuous”ではない。このことは、“retire”しても尚、“because I am who fill/ Infinitude”と述べられていることからわかるように、神がそこを満たしていることを意味しているのである。そこには神の善の業がいまだにのべられていないために混乱した状態ではあるが、悪を象徴するものではない。その証拠に、セイタンが地獄を抜け出して地球に向かおうとした時、混沌はセイタンを翻弄し、そう易々とは通過させなかった。それに対し、子が混沌に静まるよう命じたとき、混沌は素直にそれに服し、子は難も苦もなく混沌の世界を通過していくのである。

そこはまた、神が善なる創造をするための物質の宝庫である。それゆえミルトンは、混沌の世界にあるものを“ancestors of Nature”（2.895）と呼ぶのである。ここで、かつては神そのものであった一部が変化することによって万物の起源となったことにより、全ての被造物は神から切り離されることなく存在するという解釈が可能になった。従って、我々はこれまでに万物のもつ連鎖を見たが、その始点が神にあり、万物は神の本質は持たないけれども、全ては神から生まれたのだということができるのである。神の被造物が織り成す連鎖は、神を始点としながら、“The grosser”（5.416）なものを消化吸収することによって“the purer”（5.416）なものへと変化させ、最終的には神のもとへと近づいていくことを可能にした。そして、このようにして神によって生み出された自然の秩序の中で、セイタンによってもたらされた「悲惨」を人間が受けた時、連鎖の一部分として大地はうめき声を上げるのである

(9.782-83; 9.1000-01)。

結

万物が連鎖し、共生するという考えは、神と万物との繋がりにおいてキリスト教的に重要な意味を持つ。ミルトンは「無」からの創造説の中に、被造物と神との断絶された関係を見出した。ミルトンの死後18世紀に入ってから出版された『キリスト教教義論』では、「無」からの創造説が明確に否定されている。しかし『失楽園』には、これをあからさまに否定する表現は見あたらない。それは、王政復古後に置かれたミルトンの微妙な立場によるものかもしれない。国教会は、「無」からの創造説を支持し、物質創始説を異端視していたのである。しかし、叙事詩という形式は、神学書以上にミルトンの執筆の自由を制約することはなかったはずである。叙事詩である『失楽園』には、『キリスト教教義論』とは比較にならないほどの創造に関する具体的描写が神話として描きだされている。それは、神学書には記し難いであろう、聖書には見られない独自の創世神話の部分である。確かに『失楽園』には創造説に関する議論はみあたらない。しかし、ミルトンの描く神を始点として連鎖する万物の相関性、そしてその連鎖による共生の体系は、明らかに物質創始説によって支えられている。また、ミルトンが「万物はひとつの原質から創造された」(5.472)と言ったとき、「無」からの創造説を当然のこととして疑わない読者のうち、はたしてどれほどの者が「無」からの創造説と区別することができただろうか。「無」からの創造説もまた、万物は「無」からつくられた原質より作られたのだと主張しているのである。ミルトンは、「物質創始説」という言葉をどこにも用いることなく、ただ、“one first matter all” (5.472)とだけ述べ、静かに、しかし大胆に、自らの説による合理的解釈に従って、神を始点として連鎖し、共生する万物の相関性を叙事詩の中に物語として描いたのである。

註

本稿は2004年7月17日十七世紀英文学会関西支部第155回例会において口頭発表したものに大幅に加筆訂正し、発展させたものである。また本稿における『失楽園』からの引用には、Alastair Fowler, ed., *Milton: Paradise Lost* (London: Longman, 1990) を使用した。引用箇所においては、全て巻と行数のみを記載している。

1．本論におけるアウグスティヌスの邦訳は、教文館発行の『アウグスティヌス著作集』に拠る。
2．本論における『キリスト教教義論』(*De Doctrina Christiana*) の英訳は、Mourice Kelley, ed. *Complete Prose Works of John Milton*. Vol. 6. New Heaven and London: Yale UP, 1973. に拠る。引用箇所においては *C.D.* と略す。
3．魂の形成に関する説には、霊魂伝播説、霊魂創造説、霊魂先在説が挙げられる。アウグスティヌスは「無」からの創造説を支持したことにより、これらの説のどれにも承服できず、また独自の説を打ち立てることもできなかった。一方ミルトンは、物質創始説を唱えることによって霊魂伝播説を支持した (*C.D.* 316-25)。またこのことによってミルトンは、アウグスティヌスが疑問視したイヴの存在性についても合理的説明に成功している。詳細については拙論「ミルトンのイヴ再考」十七世紀英文学会編『十七世紀英文学と都市』(金星堂、2004): 150-52を参照されたい。
4．これらの物質は、天上では地中深くにあって、叛逆天使らが引き起こした天上での戦いの際には堕天使らによって爆薬として用いられた (*P.L.* 6. 509-20)。
5．『失楽園』における食事をする天使の描写には、カッバーラ主義からの影響が指摘されている。ミルトンとカッバーラ主義の仲介者として、Frances Yates は Robert Fludd の名を挙げている (256-64)。また、ミルトンの描く混沌の世界の出現の方法などについても、Denis Saurat はカッバーラからの影響を指摘している (231-47)。
6．ミルトンの時代には、すでにプトレマイオスによって唱えられた天動説が、コペルニクス、ジョルダーノ・ブルーノ、ガリレオ・ガリレイ、ケプラーらによって覆されつつあった。ミルトンは1639年、大陸旅行の最中にイタリアでガリレオと面会している。
7．Denis Saurat は、この混沌の出現により『失楽園』に二元論的世界が生み出されたと解釈したが、宮西光雄が『ミルトン研究』の中で主張したように、反対に二元論的世界の形成を阻止していると筆者も考える。神を始点とすることで、混沌の世界もまた、神の一元論的世界の範囲内に存在することとなるからである。

引証文献

Augustine, Saint, Bishop of Hippo; 赤木善光他訳『神の国』(アウグスティヌス著作集 11-15) 東京: 教文館, 1980.
―. 清水正照訳『初期哲学論集』(2) (アウグスティヌス著作集 2 - 3) 東京: 教文館, 1979.
Danielson, Dennis Richard. *Milton's God: A Study in Literary Theodicy*. London and New York: Cambridge UP, 1982.
Fallon, Stephen M. *Milton Among the Philosophers: Poetry and Materialism in*

Seventeenth-Century England. Ithaca, N. Y.: Cornell UP, 1991.
Fiore, Peter A. *Milton and Augustine: Patterns of Augustinian Thought in* Paradise Lost. University Park and London: Pennsilvania State UP, 1981.
Forsyth, Neil; 野呂有子監訳『古代悪魔学』東京: 法政大学出版局（叢書ウニベルシタス），2001.
Lewis, C. S. *A Preface to Paradise Lost.* London: Oxford UP, 1942.
Milton, John. *Milton: Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1990.
—. *Complete Prose Works of John Milton*. Vol. 6. Trans. John Carey. Ed. Mourice Kelley. New Haven and London: Yale UP, 1973.
宮西光雄『ミルトン研究』京都: あぽろん社，1961.
Nelli, Runé. 『異端カタリ派の哲学』柴田和雄訳　東京: 法政大学出版局（叢書ウニベルシタス），1996.
Saurat, Denis. *Milton: Man and Thinker.* London and New York: Dent, 1944.
Shoaf, R. A. *Milton: Poet of Duality*. New Haven and London: Yale UP, 1985.
Turner, James Grantham. *One Flesh*. Oxford: Oxford UP, 1993.
Yates, Frances. 内藤健二訳『魔術的ルネサンス』東京: 晶文社，1993.